

剣崎東村遺跡

—宅地分譲工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2019

高崎市教育委員会
株式会社 榛名土地
有限会社 毛野考古学研究所

剣崎東村遺跡

—宅地分譲工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2019

高崎市教育委員会
株式会社 榛名土地
有限会社 毛野考古学研究所

例言

1. 本報告書は、宅地分譲工事に伴う剣崎東村遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県高崎市剣崎町962番地1、963番地1・2、964番地1・2に所在する。
3. 発掘調査及び遺物整理は、株式会社榛名土地・高崎市教育委員会・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施したものである。
4. 発掘調査から遺物整理・報告書刊行にいたる経費は、株式会社榛名土地に負担を頂いた。
5. 発掘調査および整理作業は、志村哲・春里桃子・田村貴広（有限会社毛野考古学研究所）が担当し、空撮は小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）が行った。調査面積は226㎡である。
6. 発掘調査・整理作業は、平成30年4月16日～平成31年1月31日まで実施した。
7. 本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で「725」である。
8. 本書の執筆はⅠ-1を高崎市教育委員会、Ⅲ-2を春里、Ⅱ～Ⅵを志村が担当し、編集は志村が行った。なお、遺構の写真は春里、遺物の写真は志村による。
9. 本書に関わる図面及び出土遺物等は、高崎市教育委員会で保管している。
10. 発掘調査および遺物整理参加者は以下のとおりである。

【発掘調査】

岡庭秋男 岡村美弥子 北野進二 小関泰洋 佐藤剛雄 永井述史 橋元裕児

【遺物作業】

小野沢絹子 樺澤美枝 合田幸子 真下弘美 渡辺博子

凡例

1. 本書掲載の遺構図中の北方位は座標北を、断面図の水準線数値は海拔標高を示している。測量については、GNSSによる観測で、座標は世界測地系の測地成果2011年を用いている。
2. 遺構図の平面図・断面図の縮尺は1/60縮尺、全体図の縮尺は1/200とし、挿図中にスケールを付している。遺物実測図の縮尺は1/3～1/4縮尺とし、図中にスケールを付し、遺物写真も同様の縮尺としている。
3. 遺構および土器の色調観察は『新版 標準土色帳』（農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所監修 1995年後期版）に従っている。
4. 本書掲載の第1図は、高崎市発行の1/2,500「高崎市都市計画基本図」、第2図は、国土地理院発行の1/200,000地勢図「長野」・「宇都宮」、第3図は、国土地理院発行1/25,000地形図「高崎」を引用し一部改変している。
5. 遺構の略称は、住居跡：SI、掘立柱建物跡：SB、井戸跡：SE、溝跡：SD、土坑：SK、ピット：P、性格不明遺構：SXとした。

目次

例言 凡例 目次		
I 調査に至る経緯	1	2 住居跡
II 遺跡の地理的・歴史的環境		3 掘立柱建物跡
1 地理的環境	2	4 井戸跡
2 歴史的環境	2	5 溝跡
III 調査の方法と経過		6 土坑
1 調査の方法	5	7 ビット
2 調査の経過	5	8 性格不明遺構
IV 基本層序	7	9 遺構外の出土遺物
V 遺構と遺物		VI 成果と問題点
1 遺跡の概要	7	写真図版 抄録 奥付

図版目次

第1図 調査区位置図	1	第11図 SD-1遺構図	9
第2図 遺跡の位置図	2	第12図 SK-1遺構図	10
第3図 周辺の遺跡	3	第13図 SK-2遺構図	10
第4図 剣崎東村遺跡全体図	6	第14図 SK-3遺構図	10
第5図 基本層序模式図	7	第15図 SK-3出土遺物	10
第6図 S1-1遺構図	8	第16図 SK-4遺構図	11
第7図 S1-1出土遺物	8	第17図 ビット遺構図	11
第8図 SB-1遺構図	8	第18図 SX-1遺構図	12
第9図 SE-1遺構図	9	第19図 遺構外出土遺物	12
第10図 SE-1出土遺物	9		

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	4	第2表 ビット一覧表	11
--------------	---	------------	----

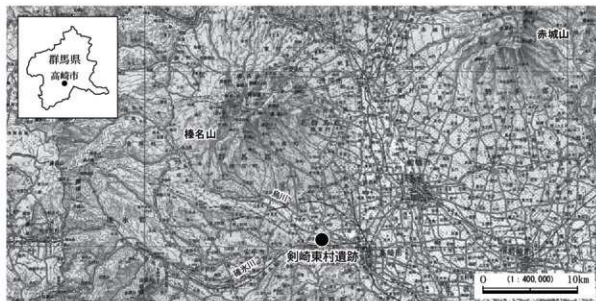
写真図版目次

図版1 調査区遠景・全景	図版4 調査区南・東側全景、発掘調査風景、S
図版2 基本層序、S1-1・SB-1・SE-1・SD-1全景・土層断面	1-1・SE-1・SK-3・遺構外出土遺物
図版3 SK-1・2・3全景・土層断面、SX-1全景・土層断面	

II 遺跡の地理的・歴史的環境

地理的環境

遺跡は、高崎市役所の北西方約4kmの剣崎町962番地1他に位置する。国道406号線の剣崎町の交差点から県道群馬八幡停車場剣崎線を約270mほど南下し、東方約300m先の宝積寺東側に接している。遺跡の立地は、東流する烏川と種井川に挟まれた八幡台地に位置する。この台地は東西に延びる小支谷により、北から剣崎支台、若田支台、八幡支台、さらに剣崎支台から東方に延びる豊岡支台に区別される。このうち、北側の剣崎支台東端に本遺跡は占地し、標高は108m～110m前後を測る南傾斜地に展開している。



第2図 遺跡の位置図

歴史的環境

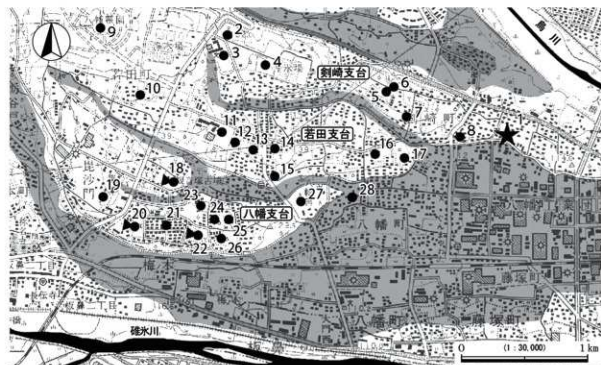
剣崎東村遺跡が位置する八幡台地は、県内最大級の横穴式石室を有する縄文音古墳をはじめとする平塚古墳・剣崎長瀬西古墳・八幡二子塚古墳など著名な古墳が古くから知られている。ここでは、剣崎支台、若田支台、八幡支台に占地する遺跡を時代順に概観（第3図、第1表）してみたい。

剣崎支台で最も古い遺跡は、標高140mの最も高い場所に占地する剣崎長瀬西遺跡(4)である。ここからは縄文時代草創期・早期の土器・石器が出土している。前期になると、遺跡は支台の東側の緩斜面に移り、標高135mあたりの剣崎稲荷塚遺跡(5)、剣崎稲荷塚遺跡3(6)、剣崎稲荷塚遺跡2(7)で住居跡が検出され、同一の集落と推定される。中期は大島原遺跡(3)と西側に隣接する剣崎長瀬西遺跡(4)で住居跡が検出され、同一の集落とされる。弥生時代後期は、78軒の住居跡が検出された剣崎長瀬西遺跡(4)が拠点集落と推定され、東方に剣崎稲荷塚遺跡3(6)で住居跡2軒、剣崎稲荷塚遺跡2(7)で住居跡2軒が検出されている。その後の古墳時代においても剣崎長瀬西遺跡(4)は中心的な存在で、県内においても際立った特徴を有している。それは住居跡52軒中、14軒から韓式系土器が出土している。また、遺跡の西側に占地する5世紀後半の剣崎長瀬西古墳(2)を中心に 方墳3基、積石塚5基、馬埋葬土坑1基が検出され、方墳から金製垂飾付耳飾が出土している。これらの状況から朝鮮半島からの渡来人、あるいはその末裔による集落の可能性が指摘されている。なお、最初に出現する古墳は、支台の舌状端部に造られた剣崎天神山古墳(8)である。主体部からは琴柱・鏡・埴・槽・杵・鎌・斧・刀子等の石製模造品が出土している。継続する剣崎長瀬西古墳(2)

も同様に、主体部から石製模造品の鏡・勾玉・白玉・斧・鎌・刀子、短甲、矛、石突、振文鏡が出土している。その後の7世紀代の古墳も剣崎長瀬西遺跡(4)で17基の円墳が発掘調査されている。奈良時代以降は、剣崎稻荷塚遺跡(5)、剣崎稻荷塚遺跡3(6)、剣崎稻荷塚遺跡2(7)で住居跡が検出されているが、連綿とした同一集落の可能性がある。

若田支台は八幡台地の中央に位置し、縄文時代前期から遺跡が出現する。中でも標高156mに位置する若田原遺跡群(9)は、縄文時代前期から後期の住居跡27軒(柄鏡型住居が2軒)が発掘調査され、この支台の拠点集落と言える。このほか、前期の住居跡を検出した若田屋敷裏Ⅰ・Ⅱ遺跡(10)がある。古墳時代になると、遺跡は支台の東側に集中し標高140m付近に占地する八幡中原遺跡が拠点集落となる。この集落の特徴は韓式系土器や石製模造品を有する住居跡があり、特に石製模造品を出土する住居跡が多いことがあげられる。詳しくみると、八幡中原遺跡第1次調査地点(11)では石製模造品を持つ住居跡が6軒、韓式系土器を持つ住居跡が2軒検出されている。八幡中原遺跡第2次調査地点(12)では石製模造品を持つ住居が41軒、韓式系土器を持つ住居が4軒検出している。八幡中原遺跡第3～6次調査地点(13)でも石製模造品・韓式系土器を持つ住居跡、七五三引遺跡(14)でも石製模造品・韓式系土器を持つ住居跡が検出している。そのほか支台の舌状部に占地する剣崎六万坊遺跡(16)でも集落が確認されている。古墳は若田原遺跡群(9)で5基の古墳が調査されている。このうち5世紀末の竪穴式石室を有する若田大塚古墳(副葬品に横板板鋸留式短甲、槍、矛)、6世紀前半の無袖型横穴式石室を有する櫛ノ木塚古墳(副葬品に水晶製丸玉)、7世紀代の峯林古墳が保存されている。そのほか7世紀代の若田B古墳では横穴式石室に刀子・鉄鏝・兵庫釧・金銅製毛彫古葉が副葬されていた。奈良時代では八幡中原遺跡第2次調査地点(12)から溝持ち礎石の掘立柱建物1棟、八幡中原遺跡第3～6次調査地点(13)から基壇状遺構1棟、礎石建物1棟が検出されている。中世以降になると、支台の舌状部に八幡宮ノ遺跡(15)の掘立柱建物5棟、鳴熊城(17)が建てられる。特に鳴熊城は柴田三衛門勝重が城主で徳川家康より拝領したと言われている。

八幡支台は、八幡台地の南側に位置する支台で、碓氷川の北にあたる。標高136m～138mに占地する八幡遺跡(21)は、弥生時代後期から平安時代までの複合遺跡で、この支台の拠点集落と推定される。弥生時



第3図 周辺の遺跡

III 調査の方法と経過

調査の方法

発掘調査は、試掘調査の結果に基づきバックフォー0.25mにより表土掘削した後、遺構の掘り下げを行った。遺構の測量及び写真記録は、調査の進捗状況に応じ適時行っている。測量については、GNSSによる観測で基準点・水準点を設置し、平面図をトータルステーション、断面図を基準点からの測り込みにより作成した。なお、遺構の平面図・断面図の縮尺は1/20を基本にしている。また、写真記録については、35mm白黒フィルム・35mmカラーリバーサル・デジタルカメラ NikonD750(2432万画素)を使用し、全体写真はドローン(マルチコプター)による空撮を行った。

整理作業は、遺構図面の修正後に第二原図を作成し、遺構ごとにAdobe illustratorCS 6によりデジタルトレースを行った。出土遺物は、水洗・注記後にセメダインCを使い接合し、補強材にエポキシ系樹脂バイサムを使用した。遺物写真はNikonD750(2432万画素)を使用し、Adobe Photoshop CS6により縮尺・トリミングを行っている。その後、遺物実測を行い、Adobe illustrator CS6によりデジタルトレースを行った。

編集作業はデジタル化した図面・写真と原稿をAdobe indesign CS2で行い、報告書作成を行った。

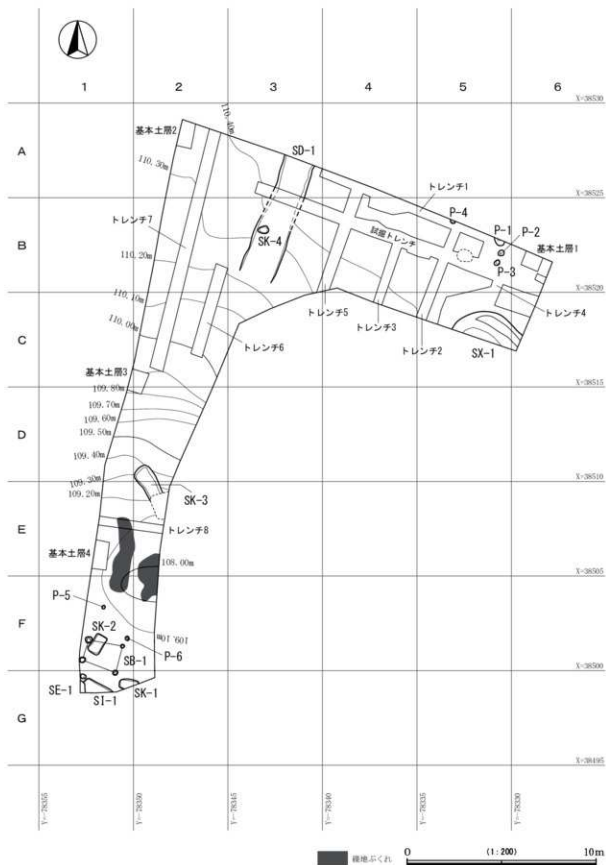
調査の経過

発掘調査(平成30年4月14日～5月11日)

- 平成30年4月14日 発掘器材運搬・調査区設定・重機の搬入。
- 4月16日 重機による掘削及び遺構確認作業を実施。仮設トイレの設置。
- 4月19日 重機による掘削作業及び掘削土の整地作業終了。
- 4月20日 高崎市教育委員会と現地打合せ後、遺構の掘り下げを開始する。
- 5月7日 高崎市教育委員会より現地調査の終了検査を受ける。
- 5月8日 空撮及び遺構記録作業の終了。
- 5月9日 重機による埋め戻し作業実施。発掘器材の撤収。
- 5月11日 重機の搬出・仮設トイレ撤去。

遺物整理(平成30年5月14日～平成31年1月31日)

- 平成30年5月14日 遺物の水洗・注記、遺構図面の整理作業を開始する。
- 5月21日 遺物の写真撮影。
- 5月22日 遺物実測及び拓本。
- 11月28日 遺物実測図のトレースを開始する。
- 12月5日 鉄製品の实測及び写真撮影。
- 平成31年1月8日 報告書編集作業を開始する。
- 1月15日 報告書の印刷を行う。
- 1月31日 報告書を刊行する。



第4図 剣崎東村遺跡全体図

IV 基本層序

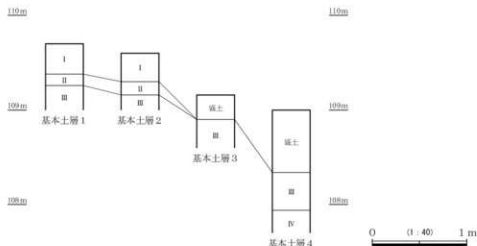
遺跡地が南傾斜地に占地しているため、基本層序は標高が高いA-2・B-6グリッドの2か所、中位のC-2グリッド、低いE-1グリッドの合計4か所で確認を行った。その結果、調査地全体は以前あった住宅建設および住宅の解体に伴いA〜C-2〜6グリッド間は掘削が進んでいた。また、傾斜地となるD〜G-1・2グリッド間は整地作業後に、数回に亘る盛土施工が行われ地表が嵩上げされていることが判明した。観察の結果（第4図）は以下のとおりである。

I層 暗褐色土層(10YR3/4) As-A(浅間A軽石) ϕ 0.5cmを中量、炭化物を少量、黄褐色軽石 ϕ 0.5cm以内を微量に含む。しまりやや強く、粘性は弱い。耕作土。

II層 黒色土層(10YR17/1) 白色軽石 ϕ 0.3cmを中量、黄褐色軽石 ϕ 0.5cm以内・炭化物・焼土を少量含む。硬くしまり、粘性が強い。

III層 明黄褐色土(10YR6/6) As-YP(浅間板鼻黄褐色軽石) ϕ 0.5cm内外を多量に含み、炭化物を微量に含む。しまりがあり、粘性やや強く、鉄分凝集の沈着が顕著である。

IV層 灰色砂質土層(2.5GY5/) 上面に砂粒を多量に含み、礫 ϕ 3.0〜10.0cmの礫層となる。



第5図 基本層序模式図

V 遺構と遺物

1. 遺跡の概要

今回の調査で、住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、溝跡1条、土坑4基、ピット6基を検出した。これらの遺構の時期は中世から近代のもので、集落の一部と推定される。そのほか、遺構外から縄文時代の土器・石器の剥片が出土しているため、調査地東側に縄文時代の包蔵地が広がると推定される。

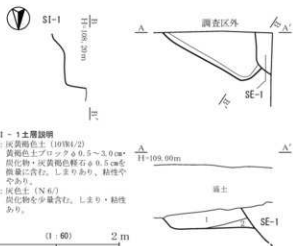
2. 竪穴住居跡

S I-1 (第6・7図、図版2・4)

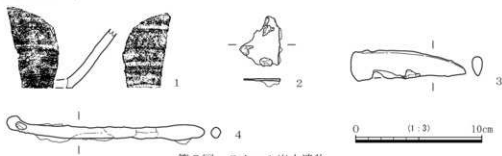
位置 G-1グリッドに位置し、住居南側は調査区外である。平面形態 方形または長方形と推定される。

新旧関係 住居の西側でS E-1と重複し、本遺構がS E-1より古い。長軸方位 不明。規模 長軸

(158) cm、短軸(77) cm。残存壁高(30) cm。遺構埋没状態 自然堆積。上面が整地作業により削平され、少なくとも3回以上の盛土施工が行われ状態が悪い。遺物出土状態 覆土1層から鉄製品等の遺物が出土している。遺物 1は瓦質土器の鐮鉢でロクロ成形による。色調は灰色(N5/)を呈し、胎土に胡雲母粒子を多量に含み、海面骨針を少量含む藤岡産製品である。2～4は鉄製品である。2は長さ(4.0) cm、幅(3.2) cm、厚さ0.3 cm、重量(6) gの平板状の製品で用途不明。3は長さ(9.1) cm、最大幅(2.3) cm、厚さ0.8 cm、重量(19.75) gで、刀子または鎌と推定される。4は長さ(15.7) cm、幅1.0 cm、厚さ0.8 cm、重量(35.78) gの大きさで、断面形態が楕円形を呈する棒状製品で用途不明。時期 中世の帰属と推定される。



第6図 S1-1遺構図



第7図 S1-1出土遺物

3. 掘立柱建物跡

SB-1 (第8図・図版2)

位置 F・G-1グリッドに位置する。平面形態 台形。新旧関係 SK-2と重複するが新旧関係は不明。長軸方位 N-75°-W。規模 梁1.10m～1.45m、桁1.84mを測る。柱穴はP1が長軸37cm、短軸34cm、深さ14cm。P2が長軸22cm、短軸20cm、深さ14cm。P3が長軸27cm、短軸25cm、深さ25cm。P4が長軸30cm、短軸29cm、深さ14cmである。

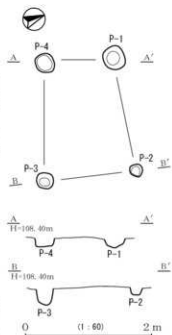
遺構埋没状態 自然堆積。時期 中世から近代の帰属と推定される。

4. 井戸跡

SE-1 (第9・10図、図版2・4)

位置 G-1グリッドに位置し、大半は調査区外である。平面形態 円形と推定される。断面形 ロート状と推定される。新旧関係 S1-1と重複し、本遺構がS1-1より新しい。規模 長軸(132) cm、短軸(52) cm。残存深度(3) cm。構築状況 本体は素掘り、脇に柱穴が附随する。P1

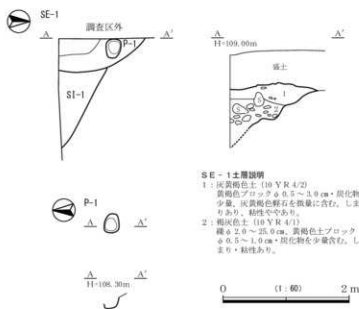
は長軸31 cm、短軸23 cm、深さ17 cmを測る。遺構埋没状態 2層中に大量の礎が人為的に投棄されている。遺物出土状態 礎と共に焙烙等の遺物も投棄された状態で出土。出土遺物 図示で来たのは1の内



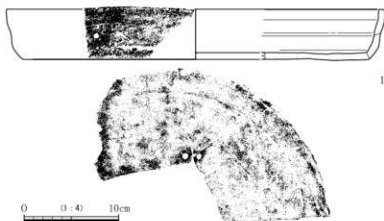
第8図 SB-1遺構図

耳系培格である。色調はにぶい橙色を呈し、口径40cm、底径36.6cm、器高5.3cmを測る。内面は灰白色(10YR8/1)で、外面に煤が付着する。胎土は精選された粘土で白色粒子を少量含んでいる。底面は平底で型作りに伴うちぢれ目が残る。体部は垂直気味に立ち上がり、底部との接合部は指押しえ後にヨコナデを施している。なお、体部と底部には各1か所補修孔が穿たれている。

時期 出土遺物から18世紀代に帰属する。



第9図 SE-1遺構図

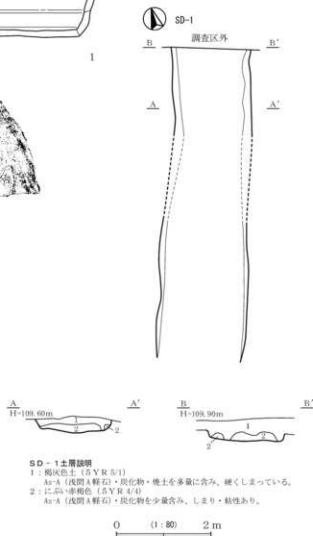


第10図 SE-1出土遺物

5. 溝跡

SD-1 (第11図、図版2)

位置 A・B-3グリッドに位置し、北側は調査区外である。南側は削平により滅失している。新旧関係 SK-4と重複し、本遺構がSK-4より新しい。底面の標高 109.20m~109.13m。走行方向 N-20°-E。断面形態 逆台形。規模 最大幅は上端部2.1m、下端部1.7m。最小幅は上端部1.7m、下端部1.3m、確認長6.6m。残存深度 36cm。遺構埋没状態 自然堆積。遺物出土状態 1層上位から唐草瓦(軒瓦)が出土している。時期 近世から近代の帰属と推定される。



第11図 SD-1遺構図

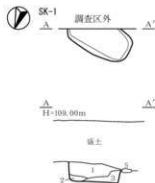
6. 土坑

SK-1 (第12図、図版3)

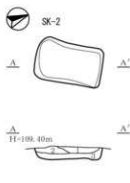
位置 G-1・2グリッドに位置し、南側は調査区外である。**平面形態** 隅丸長方形。**断面形態** 箱型。**長軸方位** N-84°-W。**規模** 長軸(106)cm、短軸(54)cm、深さ(30)cm。**遺構埋没状態** 自然堆積。**遺物出土状態** 覆土内から土師器片が出土している。**遺物** 6世紀後半の土師器坏片2点が出土している。うち1点は内黒処理をした坏である。これらの遺物は6世紀後半に帰属するもので、後世の流れ込みと推定される。**時期** As-A(浅間A軽石)が覆土に混入することから18世紀後半以降の帰属と推定される。

SK-2 (第13図、図版3)

位置 F-1グリッドに位置する。**平面形態** 長方形。**断面形態** 逆台形。**新旧関係** SB-1と重複するが新旧関係は不明。**長軸方位** N-30°-E。**規模** 長軸107m、短軸63cm、深さ21cm。**遺構埋没状態** 自然堆積。**遺物出土状態** 覆土内から陶磁器片が出土している。**時期** 幕末以降の帰属と推定される。



第12図 SK-1遺構図



第13図 SK-2遺構図

SK-1土層説明

- 1: 暗褐色土(10 YR 3/3)
黄褐色ブロックφ0.5~4.0cm多量、As-A(浅間A軽石)φ0.5cm・炭化物を少量含む。しまりややあり、粘性やや弱い。
- 2: 灰黄褐色土(10 YR 4/2)
黄褐色土ブロックφ0.5~5.0cm多量、As-A(浅間A軽石)φ0.5cm微量含む。しまりあり、粘性ややあり。
- 3: 灰黄褐色土(10 YR 4/2)
黄褐色土ブロックφ0.5cm少量、種φ3.0cm程度を含む。しまりあり、粘性ややあり。

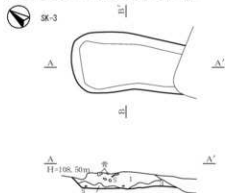
SK-2土層説明

- 1: 暗灰色土(10 YR 4/1)
As-A(浅間A軽石)φ0.5cm中量、炭化物少量、黄褐色土ブロックφ1.0cm程度含む。しまりあり、粘性あり。
- 2: 暗灰色土(10 YR 4/1)
As-A(浅間A軽石)φ0.5cm・炭化物少量、黄褐色土ブロックφ0.5cm微量含む。しまりあり、粘性ややあり。
- 3: 暗灰色土(10 YR 4/1)
黄褐色土ブロックφ0.5~1.0cm中量、As-A(浅間A軽石)φ0.5cm・炭化物を少量含む。しまりややあり、粘性ややあり。

0 (1:60) 2m

SK-3 (第14・15図、図版3・4)

位置 D・E-2グリッドに位置し、東側は後世の掘削により滅失している。**平面形態** 長方形。**断面形態** 逆台形。**長軸方位** N-33°-W。**規模** 長軸(166)cm、短軸85cm、深さ(25)cm。**遺構埋没状態** 人為的に埋め戻されている。**遺物出土状態** 覆土1層に馬を埋葬。歯が西側から出土しているため西向きに埋葬。**遺物** 須恵器・馬骨が出土している。1は瓦質土器の鉢で、色調は灰色(灰N5/)、胎土にチャート、白色細粒を含み、内外面にナダ調整を施している。2は馬歯で下顎の切歯。**時期** 出土遺物から中世以降の帰属と推定される。



第14図 SK-3遺構図



0 (1:60) 2m

SK-3土層説明

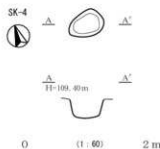
- 1: 暗褐色土(10 YR 3/3)
黄褐色土ブロックφ0.5~2.0cm・白色軽石φ0.5cmを少量含む。しまりややあり、粘性やや弱い。
- 2: 暗褐色土(10 YR 3/3)
黄褐色土ブロックφ0.5~3.0cm中量、白色軽石φ0.3cmを少量含む。しまりややあり、粘性やや弱い。
- 3: 灰黄褐色土(10 YR 4/1)
黄褐色土ブロックφ1.0~4.0cm中量、白色軽石φ0.3cmを少量含む。しまりややあり、粘性やや弱い。



第15図 SK-3出土遺物

SK-4 (第16図)

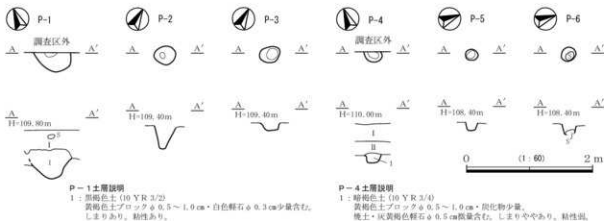
位置 B-3グリッドに位置する。平面形態 楕円形。断面形態 箱形。
 新旧関係 SD-1と重複し、本遺構がSD-1より新しい。長軸方位
 N-78°-W 規模：長軸55cm、短軸42cm、深さ26cm。時期 SD
 -1より古いため、近世に帰属すると推定される。



第16図 SK-4遺構図

7. ビット

調査区の東側B-5グリッド、南側のF-1グリッドの2か所から合計6基(第17図)が検出されている。覆土の堆積状況からP-1・4は縄文時代前期と推定される。概要は第3表のビット一覧表のとおりである。



第17図 ビット遺構図

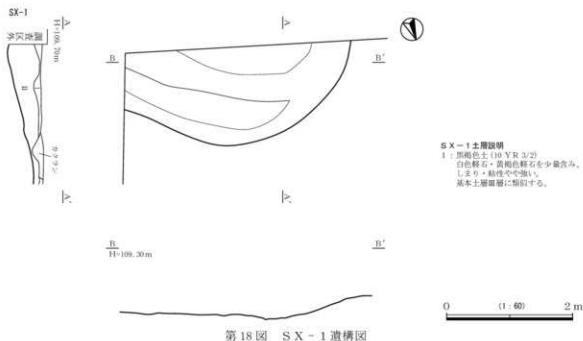
第2表 ビット一覧表

遺構名	位置	平面形態	断面形状	規模 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
P-1	B-5グリッド	楕円形	弧状	(45) × (45)	27	縄文時代前期	土坑の可能性あり
P-2	B-5グリッド	楕円形	逆台形	33 × 30	36		
P-3	B-5グリッド	楕円形	逆台形	34 × 25	12		
P-4	B-5グリッド	楕円形	逆台形	(25) × (16)	14	縄文時代前期	
P-5	F-1グリッド	楕円形	逆台形	20 × 17	13		
P-6	F-1グリッド	楕円形	逆台形	24 × 21	17		底面に縄を敷く

8. 性格不明遺構

SX-1 (第18図、図版3)

位置 C-5・6グリッドに位置し、東・南側は調査区外である。平面形態 楕円形と推定される。規模：
 長軸(2.85)m、短軸(1.55)m。残存深度(55)cm。遺構埋没状態 住宅の建設および解体に伴い削
 平が著しく、覆土1層の下は基本層序のⅢ層となる。調査区における等高線を考慮すると南傾斜地にあたり
 自然堆積の可能性が高いが、P-1の覆土1層に類似していること、基本層序Ⅲ層上面から縄文時代前期の
 土器が出土していること等を考慮して性格不明遺構とした。時期 縄文時代前期の帰属と推定される。



第18図 SX-1 遺構図

9. 遺構外出土遺物

遺構外から縄文時代の土器(第19図、図版4)が出土している。すべて基本層序Ⅲ層の上位から出土している。1～3は縄文時代前期の諸磯b式中段階の土器片である。1は深鉢の胴部で、色調は褐色(7.5Y R 4/6)を呈する。胎土にチャート、黄褐色粒子を含み、浮線文に矢羽状の刻みを施している。2は深鉢の口縁部で、色調は褐色(7.5Y R 4/6)を呈している。胎土にチャート、透明石英、黄褐色粒子を含み、浮線文に矢羽状の刻みを施し、単節縄文RLを横位に施している。3も深鉢の口縁部で、色調は褐色(7.5Y R 4/6)を呈している。胎土に赤色チャートを含み、浮線文に矢羽状の刻みを施している。



第19図 遺構外出土遺物

VI 成果と問題点

剣崎東村遺跡の調査で注目すべきことは、八幡台地の遺跡を支台ごとにみると、各支台の舌状部先端に中世以降の遺跡が占地していることである。本遺跡も同様にS I-1・S E-1・S K-3は中世以降の遺構と推定される。明治28年の『神社寺院明細帳』によれば、宝積寺は「宝剣山満福院 宝積寺 天台宗 本尊は阿弥陀如来 八幡宮の別当であった八神徳寺、大谷村(安中市)福泉寺、下室田村(榛名町)明照寺、中室田(榛名町)般若院の四か寺と共に板鼻(安中市)称名寺の末寺 安永十辛丑天(1781)3月上旬銘の須弥壇や仏具に安永二癸巳年現住寛慶(1773)」とある。『高崎市史』によれば、創建が16世紀に遡る可能性が指摘されている。この記述をもとに、18世紀代に位置付けられるS E-1は宝積寺に関連した井戸と言えよう。また、馬を埋葬したS K-3も時代的に宝積寺に関連したものと推定される。

写真図版



剣崎東村遺跡より北方の権名山裾野を望む



剱崎東村遺跡より南方の観音山丘陵を望む



剱崎東村遺跡調査区全景

図版 2



基本層序 1



基本層序 3



基本層序 4



S1-1 全景 (南西方向から)



S1-1 土層断面 (北方から)



SB-1 全景 (北方から)



SE-1 全景 (東方向から)



SE-1 出土遺物 (東方向から)



SD-1 土層断面 (南方向から)



SK-1全景 (北方から)



SK-2全景 (西方向から)



SK-2土層断面 (東方向から)



SK-3土層断面 (南方向から)



SK-3全景 (西方向から)



SK-3周辺全景 (北方から)



SX-1全景 (西方向から)



SX-1土層断面 (東方向から)

図版 4



調査区南側（北方向から）



調査区南側（南西方向から）



調査区東側（西方向から）



発掘調査風景



報告書抄録

フリガナ	ケンザキヒガシムライセキ		
書名	剣崎東村遺跡		
副書名	宅地分譲工事に伴う埋蔵文化財発掘調査		
巻次			
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第412集		
編著者名	志村哲・春里桃子・矢島浩		
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 Tel. 027-265-1804		
発行機関	有限会社 毛野考古学研究所		
発行年月日	平成31年1月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
剣崎東村遺跡	群馬県高崎市 剣崎町962-1、 963-1・2、 964-1・2	10202	725	36° 20' 38"	138° 57' 37"	20180414 ～ 20180511	226㎡	宅地分譲

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
剣崎東村遺跡	集落	中世 中世以降	住居跡 掘立柱建物 井戸 土坑 溝 ピット	1軒 瓦質土器、鉄製品 1棟 1基 埴輪 4基 瓦質土器、馬骨 1条 6基	
	包蔵地	縄文		縄文土器	

高崎市文化財調査報告書第412集

剣崎東村遺跡

—宅地分譲工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成31年1月15日印刷

平成31年1月31日発行

編集／有限会社毛野考古学研究所
発行／有限会社毛野考古学研究所
印刷／朝日印刷工業株式会社